
天蓋のパルテノン

音風 奏（雅董杏みつ）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天蓋のバルテノン

【Nコード】

N6871Z

【作者名】

音風 奏（雅董杏みつ）

【あらすじ】

現在考え中。出来次第更新します。

開封／不在

「はい、リンくん」

幼馴染みの涼子の家の玄関で、彼女から渡されたのは、小さな箱だった。

「ありがとな。……これ、今あけても？」

「うん、もちろんいいよ」

一度彼女の許可を得て、その包みを丁寧に開ける。と、

「おっ、コレは……？」

金色のネックレスのようなものが、その中の小さな箱に入っていた。箱が透明な作りになっていて、それを開けなくても中身が分かるようになってる。

「えへへ、リンくんがオシャレに興味ないのは知ってるけど、こういうのもたまにはいいかな、って……」

そういう涼子の言葉を聞きながら、俺はそのネックレスをじっくりと眺めてみた。……これ、どう見ても安物じゃないぞ……？

「お前これ、どこで？」

俺がそうきくと、涼子は

「ないしょ」

とだけ言っつて、ちろつと舌を出した。

「改めて、お誕生日おめでとう」

……そう。今日は俺の誕生日なんだ。高校一年生になってもう半年ほど経って、比較的過ごしやすい気候である今。俺はこれで十六度目の誕生日を迎えたのだ。

「ああ、ありがとな」

相変わらず、何があっても俺の誕生日には必ずそばにいてくれる彼女を見て、俺は自然と顔が綻ぶ。……不思議な話だが、それまで

三日間ほど音信不通だったのに、今日ここで会えたというだけで、彼女はこれからもずっと俺のそばにいてくれると思っっている。根拠はなくても自信はある。その自信がどこから来ているのかは、俺にもわからないがな。

涼香は俺の顔を見て、満足そうな笑みを浮かべた。

「じゃあ、今日は遠慮しないでどんどん食べてね!」

そして、その場から体をずらして、俺をその奥へと促した。
と、

「うおっ!?!」

そこには、テーブルを埋めつくほどの大量の夕食が用意されていた。涼香独特の形をした唐揚げに、色とりどりの野菜サラダ、光沢でも持つてるんじゃないかと思うほどに輝くデミグラスソースがかかった、目を疑うほどきれいに焼きあがっているハンバーグなど。それら全てが、俺と涼子の二人分、置かれている。

「……これ、全部お前が?」

料理が得意なのは知っていたが……。

「えへへ、はりきっちゃった」

いや、はりきったとか言うレベルで済むモノか、これは? 世の中見た目より中身というが、中がよければ外もいという事もあり、これはどうみても後者の部類だろう。彼女の料理が美味しいのは俺の舌がよく知っているが、それ以前にもう見た目だけで充分に美味そうだ。

「今日は、ほかに誰もいないからね。わたし、ちよつとがんばりすぎちゃったかも」

親同士がとても親密な仲にある俺たちは、毎年片方の家族の誰かの誕生日には、二家族合同で盛大に誕生日会を行うのがルールになっていた。が、涼子の両親は仕事の急用でどこかに行ってしまったし、俺の両親と妹も、妹の塾の合宿に参加している。ので、今年は俺たち二人だけなんだ。

それにしあって、この量とクオリティはあまりにも豪華すぎる。

とは思つものの、俺はどちらかというとなんかことより、彼女の行為自体がとても嬉しかった。俺のためにこんな用意をしてくれた彼女に対する感謝の気持ち、俺の中からあふれ出そうなくらい、嬉しかったんだ。

だから、

「すげえ！ マジですげえよ！ ありがと涼子！」

なんかこう、つい興奮してしまうのだあ！ うえーい！

「これ、俺のために作ってくれたんだろ？」

「もちろん、そうだよ」

興奮という名のジェットエンジンに火が付いた。

「うはっ！ 涼子、マジでありがと！」

俺はたまらなくなつて涼子の手を握り、彼女の目を見つめる。やべえ、笑顔がとまらない！ どこぞ変態みたいだ。が、いまはそれよりメシだ！ うほおおお！

「リンくん……。えへへ、嬉しいなあ」

涼子が照れた。頬を赤らめるとその顔がリングゴみたいで、でもそんなことよりやっぱり俺はメシに目が行ってしまい、

「んじゃ、いただきまーす！」

勝手に椅子に座り、箸を取った。さあ食べるぞ！ うおお！

「あつ、リン君、先に乾杯を」

「（ごっくん）うんんんんめえええええええええええええええええ！ 最高だ！」

「……まあ、いつか」

涼子のうますぎるメシを平らげた俺は、しばらく涼子と駄弁つたり、一緒にテレビゲームをしたりして、気が付けば、日付の変わる一時間前になつていた。

よく考えれば涼子に誘われたのは七時前で、つまり四時間以上もお邪魔していたわけだ。楽しい時はすぐ時間がたつものだと改めて

思う。

流石に日を跨ぐまでお邪魔するわけにも行かないので、俺は涼子宅を後にした。涼子は最初、「一人は怖い」と言い出して俺の帰宅を拒んでいたのだが……。

「うわー、久しぶり」

成り行きで、同行することになってしまっていた。

「リンくん

の家に来るの、半年ぶりかな？」

俺の懸念もいざ知らず、彼女は無邪気に俺の家を眺める。……四

人家族が暮らすには丁度いいってだけの、ただの一軒家なんだがな。

って、そんなことはどうでもいいんだ。問題は、

「お前、ホントにウチで泊まってくつもりか？」

彼女が、俺の家で泊まっていくつもりでいることだ。

「だって、リン君帰っちゃうし、わたし、一人でお留守番するの怖いし……」

彼女が少し引つ込み思案気味で心の弱い子ということは知っているが、まさか高校生にもなって一人で留守番が怖いとは……。女の子なのだから仕方ないと言ってしまえば話は早いが、今時の「女子」というのは怖いどころか、自宅に一人でいることを幸福とする奴が大多数だろう。だからむしろ、所謂「女々しい」という言葉に当てはまる女の子のほうが、圧倒的に少ないんだ。このご時勢は。

だからこそ意外なのだ。

「いつそ、俺が涼子の家に泊まればよかったかも……」

なんて呟く俺だが、今更もう遅い。俺は家の鍵を開けて、涼子の中へと促す。もう仕方がないからある程度のワガママは聞いてやってもいいと思ったのは、さっきの料理のせいかな。

まあそれでも、悪くないさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6871z/>

天蓋のパルテノン

2011年12月23日00時54分発行